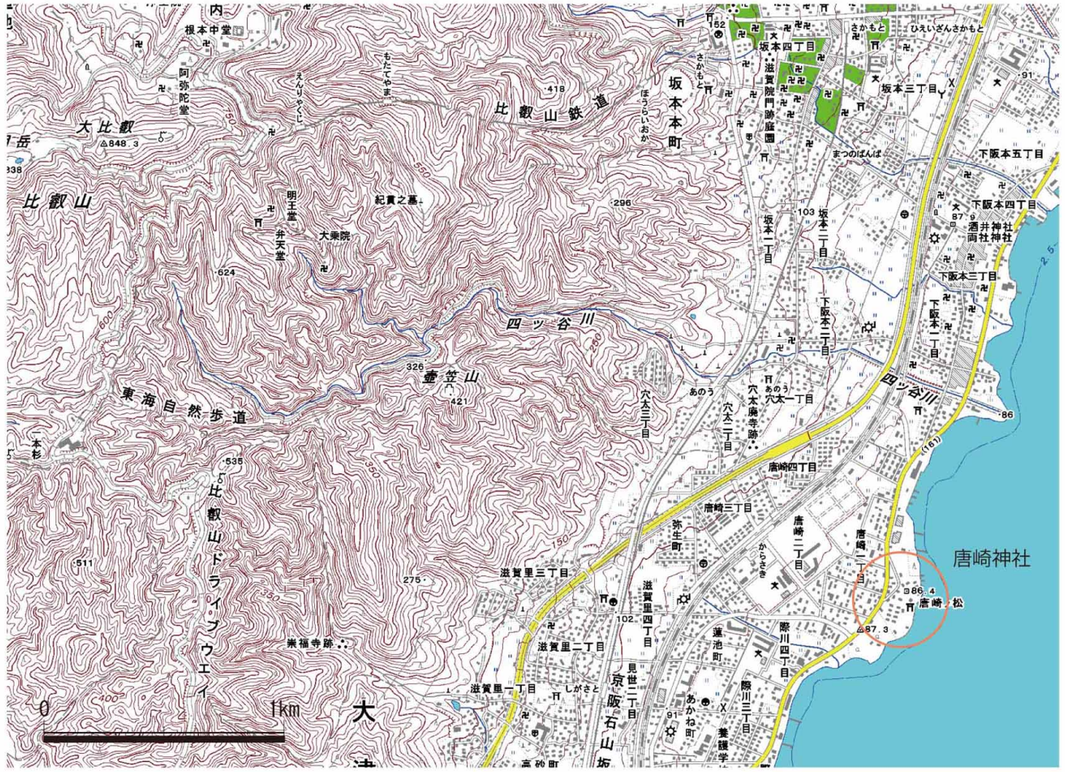
周辺のみどころ

唐崎周辺には、天智天皇によって造られた近江大津宮跡や古代寺院跡などを見ることができる。

近江大津宮錦織遺跡（おうみおおつのみやにしごおりいせき） では、建物の遺構表示がなされた史跡公園が整備されている。

宮跡周辺には史跡穴太廃寺跡（あのうはいじあと）や史跡 南滋賀町廃寺跡（みなみしがちょうはいじあと）、史跡 崇福寺跡（すうふくじあと）、園城寺遺跡（おんじょうじいせき）などの古代寺院が点在している。JR唐崎駅北側には、大津宮の整備に伴って伽藍が造り直されたことが知られている穴太廃寺跡がある。また、南滋賀町廃寺跡や崇福寺跡では当時の 基壇（きだん） や 礎石（そせき） などが残されており、当時の姿に思いをはせることができる。

近江大津宮錦織遺跡石碑



[アクセス]

●JR湖西線唐崎駅下車　徒歩５分

[もっと詳しく知りたいひとへの案内]
（関連文献／関連施設）

●大津市歴史博物館　TEL　077－521-2100

●『新修　大津市史』４　近世後期　1981年

唐崎　－唐崎の松と夜雨（やう）－

大津市唐崎

唐崎の松

近江八景の一つ「唐崎夜雨」は、湖畔の「唐崎の松」に降る夜間の雨の情景が主題となっている。笠のように大きく枝を広げた唐崎の松は、その起源を天智天皇の頃にもつとされる。

この松は唐崎神社の神木であるため、大風や枯死などで失われるたびに、新たに植え直されてきた。歌川広重の浮世絵にも描かれた先代の松は、大津城主新庄直頼の弟直寿によって天正19年（1591）に植えられたと伝えられる。現在の松は先代が枯死した後、昭和4年（1929）に植えられたものであるが、その姿は古代より続く景勝地の姿を今に伝えている。

広重の「唐崎夜雨」（大津市歴史博物館蔵）

唐崎神社から琵琶湖をのぞむ

唐崎　唐崎の松と夜雨

所在地　大津市唐崎

唐崎と七瀬祓所

唐崎（辛崎）の地名は、古く飛鳥時代にさかのぼる。柿本人麿は、壬申の乱ののち、荒廃した大津宮跡周辺の姿を詠んだ和歌を万葉集に残している。

　さざなみの志賀の辛崎辛くあれど
　大宮人の船待ちかねつ

（近江の志賀の辛崎は昔のまま変わらないけれど、宮中に仕える人々の船にはもう出会えなくなってしまった。）

このことから、辛崎（唐崎）は近江大津宮の当時、宮の外港として大いに栄えていたことを知ることができる。

古代において、唐崎は禊ぎ所であった。禊ぎ所とは、人々が災いや病魔といった「けがれ」を祓うため、清浄な水をつかった沐浴の儀式である「禊ぎ」を行う場所である。唐崎では奈良時代後半頃の土馬が出土しており、この頃から禊ぎが行われていたことが明らかとなっている。

平安時代になると、瀬田河畔の佐久奈度神社などとともに七瀬祓所の一つとされ、桓武天皇や嵯峨天皇、藤原道長なども度々、この地を訪れている。

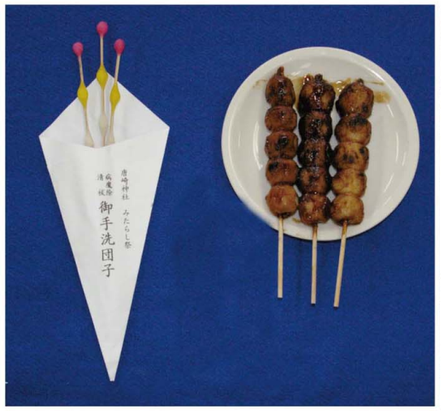
こうした禊ぎの姿は、藤原道綱の母の「かげろふ日記」や藤原実資の日記である「小右記」などの平安文学にも登場している。

二つの祭礼

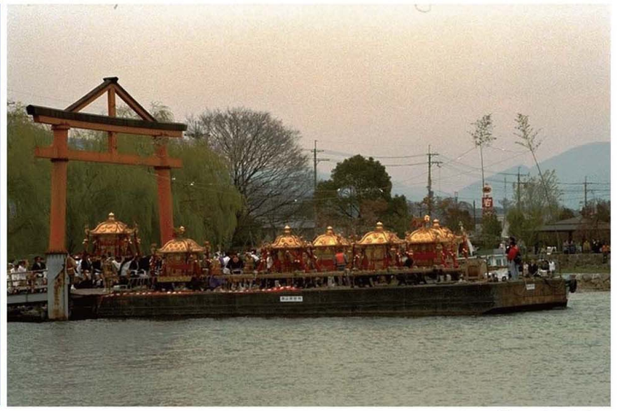
唐崎の地を舞台として、古くから２つの祭礼が行われている。唐崎神社のみたらし祭りと日吉大社の山王祭である。

みたらし祭りは、夏の大祓に起源をもつ祭祀である。新暦の７月28日・29日、罪穢を祓うため、参拝者は氏名や願い事を記した人形・忌串を神社に納める。これらは社殿で祓い清められた後、人形が湖中へ投げ込まれる。また、釣鐘形に積み上げられた忌串は、湖中で清めた後に、火で焼き払われる。これらの祭礼は境内で行われる茅の輪くぐりとともに、古代の祭祀の色彩を色濃く留めているといえよう。

また、「みたらし団子」は、この祭りで売られていた「御手洗団子」とよばれる串団子が語源であるとも伝えられる。



「御手洗団子」と「みたらし団子」



山王祭の船渡御

山王祭は、新暦の4月12日から15日にかけて、日吉大社で行われる豪壮かつ華麗な祭礼行事である。祭礼のなかで、七基の御輿が御輿船に移座され、唐崎沖まで進む船渡御が行われる。船中では、供御によって「粟津の供御」が献じられるのである。

これは、西本宮祭神の三輪明神（大己貴神）が田中恒世の船に乗って唐崎へ渡御したとき、船中で粟の飯を献じたところ、これを喜んで受けたとの故事にちなむものである。唐崎沖の湖上を舞台する華麗な神事である船渡御は、山王祭の重要な祭礼の一つである。